

珍
談
雜
煮
餅

竹
亭
綠

091797-000-6

特47-566

珍談雜煮餅

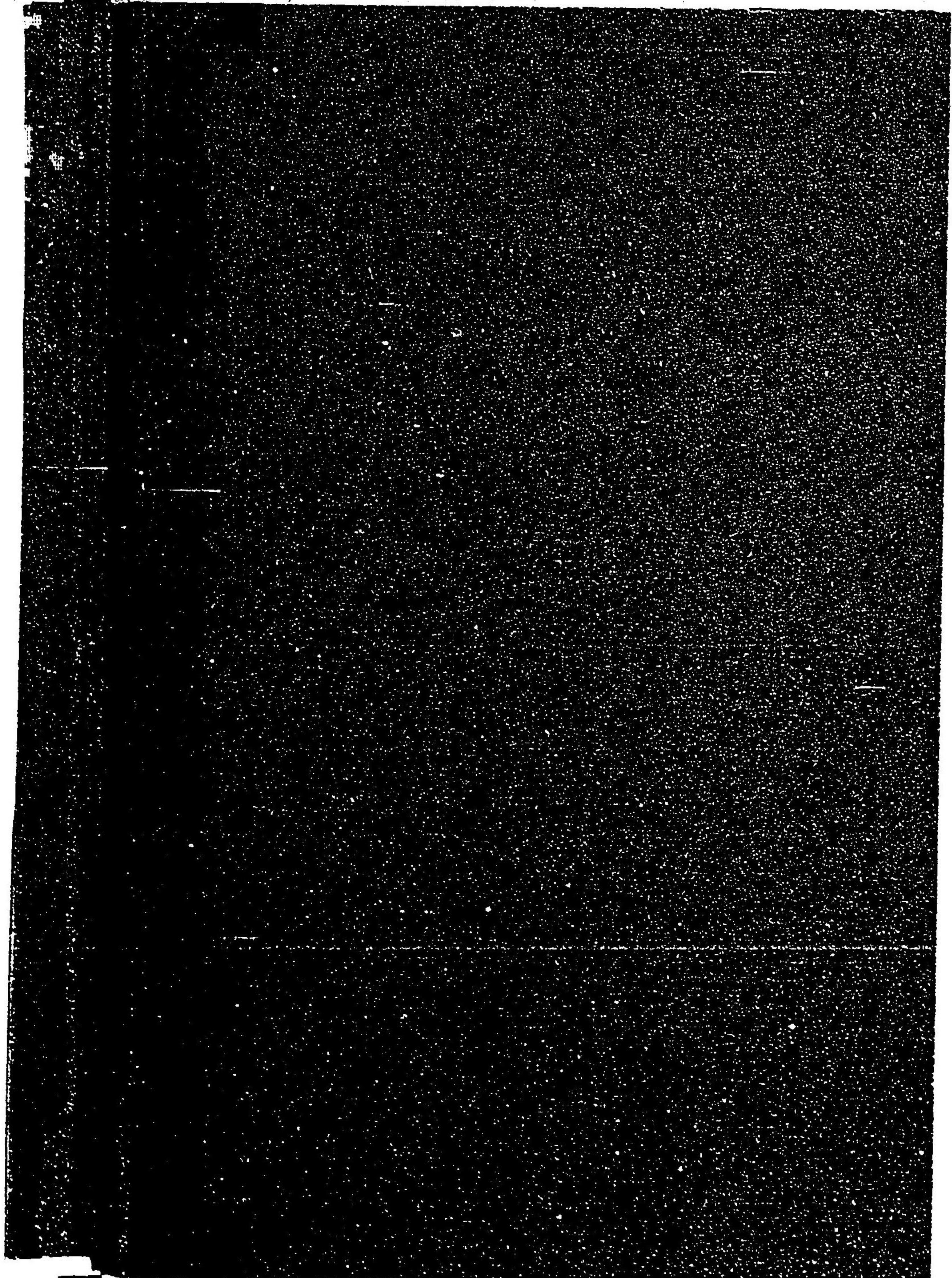
竹亭綠/編

M16

DBO-0312



特
5



ex 668

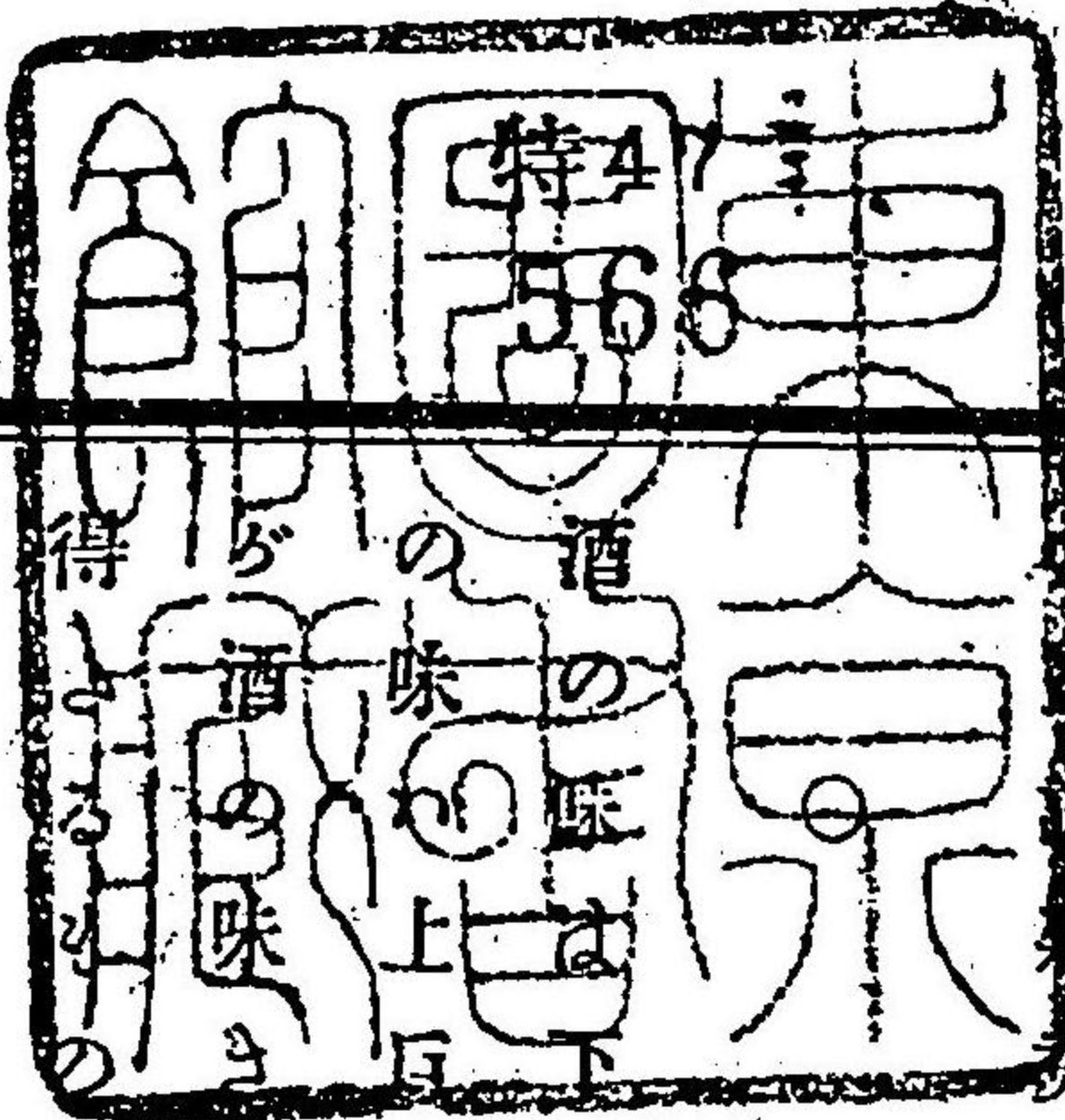
3085

92
4
58

菊亭靜先生序
竹亭綠著述

珍談雜煮餅 全

明治十六年四月 金章堂



の珍談雜煮餅の序

酒の味は上戸も之を知れども、上戸の之を知るより如き餅
 の味は上戸も之を知れども下戸の之を知るより及ばぬ、劉伶
 が酒の味を知り何曾か餅の美を知るは共々其の眞味を
 得ざるものからんか、竹亭子此より一書を著す名て珍談
 雜煮餅と云ふ、余曰く吾れ未だ其書を見せど雖も已に竹亭
 子の下戸なるを知るものなり、其手製の雜煮餅たる美なら
 ざらんと欲するも豈に得可んや、不幸にして余上戸の上席
 ありと雖も、此の餅の味き事決して疑ふ可らず、嗚呼余の
 如き上戸すら其の美なるを知る、天下の下戸ソレ喰ざる可

んや、ソレ喰ざる可んやト云爾

妻戀の春雨樓に於て

菊亭静記

緒言

滑稽奇談を以て官民の内幕を摸寫し上下の情意を通するの作者の本色なり民間の穴を探り或は政府を誹譏すると作者の通弊あり今ま世も行はる、所の冊子を視るも行文の巧拙の暫く措き寓言を以て一世を諷し滑稽を以て時弊を戒めざるの書藝あり然れども都鄙官民の内幕を一紙に寫出して一讀都鄙の現象を知らしむるの書に至りては蓋し曉天の星宿ならず隨て世人をして隔靴搔痒の歎を抱かしむるもの少あしと云ふべからず今ま世の光景を視るも漸く官民不和の兆を顯し上下猜疑して各々不安の情を抱くもの、如し是れ上下情意の通せざるもわらざるべきを得んや言を換へて言へば互も其内幕を知らざるも坐

四
するのミ此の冊子の如き敢て官民の内幕を摸寫し上下の
調和を謀ると云ふよわらされども聊か都鄙官民の内幕を
一紙に寫して上下猜疑の念を絶つゝの微意も出てゐるもの
なき世の人々幸に民間の穴を探くるものとなす勿き

編者識

目次

- 朝野横濱兩記者相争ふて帝政党の城郭を攻落す
- 南柯の一夢
- 各地方政黨創立の内幕話
- 地方新聞組織の穴探

珍談雜羨餅

朝野横濱兩記者相争ふて帝政黨の城郭を攻落す
 明治五年東京日々新聞始めて世に出で日新眞事誌と並び
 行はれしも其勢力微々として振はさりしか新聞は日月
 流行し今日となりては都鄙新聞の數々百の多きと登り其
 種類も亦と多きからそ客歲中特り紙幅濶大記事蕭索澁紙
 新聞を以て一時其名を世に知られたる彼の東洋新報の歲
 暮に至り休刊の廣告と共に幽靈の如く立消とあり社長水
 野寅次郎氏を始め其他社員も音もかく香もかく跡白浪と
 消失せたる如く本年一月頃活版諸器械とも賣拂ひ其街
 跡の寂として人聲なく銀座街頭化物屋敷の如し然れども
 水野氏の朝又書記官とあり夕に新聞記者となり出沒自在

變化極りなき一才子かれと諸器械の賣拂ひしもの、化物屋敷は潜伏して如何なる策略を運らすも知るべからず左き世の人々の頼朝の石橋山の苦戦に洞穴は潜伏し難を免れて後圖をちし終に覇業を奏せし如く思ひなし人々少しく躊躇ふうち彼の機敏と雄辯を以て夙に其名を世に知らせたる東京横濱毎日新聞社長沼間守一氏は早くも化物屋敷なることを探知し該所を乗取り城郭を移して朝野新聞と對門の陣を張り大に爲す所あらんとせし朝野記者の之を探知し直に精兵を放ちて東洋の舊城郭を襲撃せしを以て一兵を損せし刃血塗らすして難なく攻落し更に朝野繪入新聞を買入れ該新聞を茲に移し成島柳北先生と同記者を指揮して記者を監督し新に今回買入れたる

活版を以て鮮明に摺立て自由繪入新聞東京繪入新聞を壓倒して全勝を小新聞社會に制せんす勢ありと沼間氏の計畫其圖は當らば朝野記者の爲め先んせられし其無念遣る方なく東京日々新聞の城郭こそ余親ら精兵を率て攻落さんとして今より謀を帷幕の内運し居るよしあるり吾曹子昨今の金蔓は離れ金力銀勢を失ひ恰も木から落ちたる猿の如き姿なれは將來果して沼間氏の精兵に當るの勇氣あるや否やの知らされども吾曹子も亦一方の上將軍を以て阿容々々降伏するか如きことゝ知らざるべけれど金蔓は離れ新聞の賣高の日に減せられ到底維持法なきものゝ如し左れの例の七面主義を執り今後自由黨も變化し十四年開拓使官有物拂下の際奇抜ある筆を揮

て政治社會も現れよるか如く一變化の妙を演ずるにわ
らされの恐らくの沼間氏の鋭鋒も當るを得ざる危きかそ
の兎も角帝政黨員の朝野記者の爲めに一城を攻落され今
や據る所の僅に東京日々新聞と明治日報のみよして孤城
落日の勢あれは末流輩の將來如何ある浮き目も遭ふも測
られずとて小才子のもの共の足下の明るきうち尻も帆を
掛け逃出すやら彼の丸山翁のやんことなきか方又賣られ
たりとてブツブツ不平を鳴らし忠愛社への顔出しもせそ
山下ある東京公同會へも碌々出張らす自宅も引籠り居る
より其内幕の鼎の沸く如く少しく火氣を加ふれの破烈
そるか如き勢なりと熱附冷離の徒の寄合の先つこんき物
といふひなから聞くも哀なる政黨とや云ふべけき

南柯の一夢

春雨一け々と降り來りて芸窓晝猶は暗く物讀み筆執る
こともあらぬの無聊遣る方かく何時ともかく机もよき
てまどろむうち傍より起きよ々々と呼ぶものあり眼を
拭りあから起き上り見れは鶴髪の老翁賣の草衣を著し右
手は鉄扇を携へ異風の粧飾にてありけれの恐ろしさ云ふ
計りなく胸のドキ々々翠丸の釣上る程驚きしう却て弱
身を見せよらんよの悪しうりあんと思ひけれのよふこそ
見苦しき草廬危と述べ終らざるよ彼の老翁の只今見させ
々尋ね來りし餘の儀もあらそ豫て汝の口より出任せ筆
まかせ世のあるとあらゆる事ども書き記すよし聞き及ひ
けきの世も最とも珍らしき怪談を筆記せしめんため來り

十二
いなりと云ひあゝら傍の椅子は腰打ち掛け鶴髪は垂れて
地を曳き眼玉は六寸玉の水晶の如く口の鱒の如く半鐘聲
よて話しけるよふ日本を距る數百里日の丸國と云ふあり
其北方福島州の住民々權張藏と云へるは夙は民權可張民
權不可不張と民權の一本槍で其名を世に知られたるもの
あるか一體全体此の男の性少しく過激粗暴の質を有る
動もそれを封建時代の天誅とか何んとか蚊んとか血祭騒
きう得意を有る州長暗雲押藏の豫て眼を付け平常其舉動
を探偵なり居る際先づ年州民は此處彼處に數千人寄集ひ
土ふ工ふと烈しく騒ぎ廻る折柄張藏は平生の如く何れ會
蚊も會へ出席して傘提灯でも張る意氣込めて無謀無策に
民權を張らんとせしものから遂に暗雲押藏の爲めお生捕

られ獄屋を繋なうれ閻魔大王の糾彈を受けしう大王の其
罪跡證據分明あらされの其由を暗雲押造の許へ通知せし
し押造は火の如く怒り一片の回答もあさす直お首府ある
閻魔王の本店へ向け腰抜け閻魔役は並に健氣の閻魔を
派出せよと電報を掛けられ本店の赤鬼青鬼どもは押藏
の無禮を憤はりぶツ々々大騒ぎを始めしは閻魔王の毫も
憤るる氣色もあく押藏の意のまを々々赤鬼を遣らんうい
や青鬼を派出せんうと狼狽して騒ぎ廻るしものから赤
鬼青鬼どもは益す々々閻魔王の腰抜けしして押藏の爲め
よ左有せらるるを憤はり一時の病と稱し出てさるものあ
きは閻魔王の又候ヒンケリキヤレン奥驚仰天して再び青鬼赤鬼ども呼ひ集
め秘密會議を開らき青鬼を遣らんう將に赤鬼を派出せん

うとの議按を下附せしかと赤鬼暗雲槍藏一番と呼び突立ち上り満場を睥睨して曰く這回大王閣下より下附せらるる議按は速に廢棄せんことを望む何となれば押造の電報を見るに其文簡單にして其意を知るに易しかりと雖も暫く文字上は就て論ずべきと大王閣下の權利を蹂躪したる傲慢無禮の電報あればあり加之ならず押造の意のまゝ々々派出せは當り新聞記者演説者の爲めに嘲笑せらるゝのみならず世人の笑を招き之をより吾々の權利之地に墜ち併て大王閣下の面目に大關係ありと述べ了らざるに青鬼髯野撫造は三番と呼び起立して曰く只今暗雲君は廢按説を提出せらるるか本員の觀る所を以てすきと此等の事と會議を附せらるゝ迄もかく大王閣下の特權を以て

派出せられて可あらん成程暗雲君の如く理論上より見解を下す時の今回派出の事、或は大王閣下の面目に關することありと云ふべからざるも實際上より論ずる時は到底派出せざるを得ざるものあり徒らば理論の拘泥して實際を審察して事を處せされは甘く世を渡るを得ざるの恐をわきとあり満場の諸君よ幸に本員の意を諒し賛成あらんことを望むと述ふるや否や六番喰内閣介起て曰く本員の髯野君と同論されとも熟々原按を見るに議按の精神之單に派出の事を議するに止らず當器の人物を撰擧するの點を存するものゝ如し念の爲め一寸番外の説明を望む番外腰野拔作曰く御意見の通り喰内再び起て曰く然らば本員の智恵野内造君を派出せらるゝことを望むと述ふ

るや二番鼻下干揚八番塵野掃三と六番を賛成して於是間度
 大王の笑を含みおから別に御説きよふ見受くれと無論
 六番喉内君の御説通り智恵野内造君を派出することに決
 めべいと述ぶるかと思ひけきは是をあん南柯の一夢あり
 き

各地方政党建立の内幕話

自由の説の出を崩し民権の論の河を歴するの勢あるの今
 日地方の景況此處は數本改進と云ゑるあり夙は民権論の
 一本槍を以て稍々其名を縣下に知られざるものあるか或
 る日晴雲張藏と云へるを訪ひ今日更さ々々推參せしは餘
 の儀は候はず近頃他縣の景況を觀るは三十有餘縣自由改
 進或は帝政保守なんと云へる党派起らざるのあり特り我

縣のみ政党建なきは他縣に對し面目なき次第なり是非政党建
 を組織せされは二十三年の後他縣人に頭の上らぬと必定
 ならんか吾々自由改進の主義を執る者と自ら奮て政党建を
 組織せされとならぬ場合と存し御相談に罷出さる次第な
 りと述べければ如何様御尤の次第なれと党名を自由党
 と稱すへきや改進黨と唱んか此邊のよく御相談ものなれ
 ど近頃改進黨の評判高く東京の勿論他縣も於ても改進黨
 も加盟するもの多きよしなるか成程大隈の大部漢洋兼備
 の學者あり口も筆も達者の人もわれは評判のよひの無理
 はないの何と云ふても自由民権の親玉の板垣さんさうら
 自由党も限ると思ふらどうでせう成程民権の元祖の板
 垣さんと相違はないか去年板垣さんの洋行の事より馬場

末廣田口田中等有名の諸氏は何よる議論か合はぬとて自由新聞を退社されしより自由党はメツキリ評判悪くなり東京に於ては該党に加盟するものはないそふな元々自由も改進黨も名こそ異なれ其主義は同じものさから僕の考は評判のよい改進黨を立つるか上策ならんと思ふ所外の評判は兎も角自由と改進黨とは多少主義も異なるならん其證據は板垣さんの洋行の折り横濱毎日記者の板垣さん路費を政府より貰ふと何んどか蚊んどかおつに書き立てたるものうら自由新聞記者の其妄を駁しそれより自由党と改進黨の何となく居合悪く互に穴の探りくらをなすよふな評判もあるか横濱新聞の沼間氏自由新聞の古澤氏達のそれ位の事を新聞紙上で議論をなす筈はないから何れ

主義か異なるよふと思ふそんな事の後祭り第一肝腎要の自由を得されの政治を改良し事物を改進黨することも出来されの尊ぶべきの自由党なれの自由党と稱するのよからん蓋暗雲君の自由黨賛成なるう先づ改進黨自由兩黨の人物を比較して見給ひ改進黨にの第一大隈さんを始め河野前島北島春木矢野小野島田沼間氏等何つれも役者う揃て居るでないう去りて僕に何にも人な党する譯のないう一人として自由を欲せざるものないやばり党名の由の文字の党名に附するの餘り感服しないやばり党名の改進黨よい暗雲君の自由党にほらされのならぬと云ふ確乎なる理由あらぬ明瞭に辨し給ひ其辨解に依りての賛成もしやう暗主義の何ん蚊んど仰山に六ヶ敷理屈を並べ

立つる積りのなかつたり改進黨の綱領を視るゝ硬貨主義を執ると云ふ一條の受け取れぬ話なれの言ふべくして到底行のれざる金看板を掛け虚勢を張るより寧ろ自由党の如く人民の幸福を進め權利を伸暢する位の淡薄なる看板を掛けたいと思ひよれの賛成したのさ數硬貨主義を執ると云ふことはあるか何よも之を今日斷行する譯ではなく漸次硬貨主義を執ると云ふよとあり今日の政黨と素より準備政黨だから其主義を斷行する覺悟あれとも果して實行し得らるゝや否の今日之を期する能はされとも飽くまで實行する積りなきの自由黨の綱領の如く茫漠でかく成るべく緻密に其目的を掲載することを善の善なるものならん暗御論と立派なれとも政黨を組立つる折とも東京改進黨

黨の綱領を丸取りする積りのさ數東京改進黨へ合併せらるから理屈もへちまも入らないの特立の一黨を組立つる積りたのら議論もするのた其場合よあれの丸取りする譯もあらあいかから少の文字を轉倒するとの條項を變換して文字を増減せされの東京改進黨の幽靈か現のれたかと反對黨より嘲笑せらるべしそと免も角暗雲君の改進黨と唱ふるも異論はないかさ數政黨を組立つるは大事なきと尙ほよく勘考の上返答せんと答ふる折りいさ數の障子がラット放けて入り來ると飛揚進藏あり飛何にか大議論のよふたり傍聴と出懸け不都合はあるまいの暗議論と云ふ程でもないか今數本君が來て今日政黨なきの我縣のみあれの政黨を組織しよふと云ふから其相談最中たの數本

君と改進黨賛成僕も自由党を賛成し未だ議論纏らぬと云ふ一件あれは飛揚君も傍聴者とかつゝ氣取らそ名論を立て給ひ飛成程兩君の議論の何つきも道理あるか改進黨自由の兩党の其主義大同小異ありて唯結党も前後の別あるも過ぎそ左きの故らゝ區別を立つる程も及ばざるべし今日は改進黨自由共々馳騁して彼の反對なる帝政保守なんと云へる党派を叩き潰そか肝要ならん兩君の議論を合せて自由改進黨と稱してはどうだろう哉御名論の通る今日は帝政保守党もあそば自由改進黨相争ふ場合にあらざるは勿論あれと反對党は素より氣運に逆ひ人心も戻して起りしものなきは今より七年の間に自滅するは必定ならんか左れを二十三年の曉は自由改進黨の兩党のみ存し互に國會

壇上も論鋒を争ふに至るへきかと思ふなり左わらんは自由改進黨の党名を附すれを兩党の姿となり不都合ならん哉數本君の論せらるゝ通り二十三年後の事を心配すればよそ自由党とか改進黨とか何つれか一方の党派を立てよと思ふなり飛自由改進黨と稱すれを成程一寸兩党を合併したる党名によふなるか東京の大新聞を始め大坂なる立憲政黨新聞記者すら自由改進黨主義を執ると云ふ語を用ふるから自由改進黨と稱し毫も差支はあらずと思ふがら發言せしが不都合なれを單に立憲党と稱したらよりろふ也只立憲党と稱すれを自由党の將た改進黨う或は帝政党か他縣人か視る時は譯が分るまい今少し何んどのよき名稱ありそふなものゝ數彼れ帝政保守兩党も憲法を立

て上下の権限を定むるは均しく冀ふ所なれば唯立憲党と稱する時は世人も帝政黨と誤認せらるゝも知るべあらば依て地名を頭に附して何々立憲政黨と稱すればどふだろふ飛良しや頭に地名を附したるにもせよ立憲政黨と云へを何んたか大坂立憲政黨の配下の如く見へ面白くない暗名按か出た地名を頭よ置き何々自由党と稱しさら兩君賛成さるふ僕は持論の改進の頭よ暗雲君の發言されし地名を附し何々改進黨と稱せば改進主義を執りて自由を主張することどう明瞭か分り帝政黨と誤認せらるゝの氣使なかるべし飛藪本君の發言最も妙々大賛成總て會議相談は多數決さよ暗雲君藪本君の説も賛成し終ひと無理も勤められ濫々同意を表しける飛党名確定せし上は綱領を起草

せさればならないをそれの兩君も願ひし暗綱領は必要なれども某々等も政黨組織の事を相談もせず其綱領まで起草して廻しさらんよは吾々三人に従ふ姿となるものうら陰よ不平を鳴らし加盟するもの少なからんを左あらんよの組織上甚さ不都合なりと胸に手を當て暫時默然さり藪暗雲君の心配せらるゝの如く實際上或と斯ることあるや否の保證せされとも素より政黨の人よ覺するにあらず主義を以て合するものかれ何人う起草すれんとて其主義は是ならんよの聊う差支あるべし若し不平を鳴らし加盟せざるもの我党の人にあらされは斯る事理も暗き愚者の打ち捨て置くべし某々の賛成するや否やを豫想して心配するより速に綱領を起草するう肝要あらん暗然ら

の綱領を起草せし上廻狀を以て同志者を會し起草接を討議せしめされの同志者中満足を欠くものあるやの恐れあきましもあらされは會議に附するも亦之黨員募集の一手段あるべし飛綱領の會社の規則と異なれば會議に於て確定するものもあらず若し會議に附するか如きあらは世人の嗤笑を招く恐れあきにほらず起草せし上の廣く縣下の人より示し同主義の士を求め結合せざるべからし仕儀に依りての僕自ら縣下を遊説すべし何う黨員の多少を憂ふるも及んや最早點燈時に及ひけしは晩食後綱領を起草すべし飛綱同意を表し食後再び三人相會す飛自ら筆を把りて左の緒言盟約を草す

緒言

回顧すきは一昨明治十四年大詔一發憲法を立て國會を開くの期定まる矣此時より方り苟くも改進黨を執るもの國會開設の日より方り其主義を實行するの準備なかるべからし吾黨の主義の内治を改良し社會の安寧を保ち人民の幸福を企圖するものあり來れ々々吾黨と主義を同ふするの士より來て賛成する所あり

何々改進黨盟約

我黨の何々改進黨と稱す

我黨の左の主義を持する者を以て團結す

- 一 皇室の尊榮を保ち人民の幸福を増進する事
- 一 善美なる立憲政體を立つるも尽力する事
- 一 國權を振起して國威を海外に輝す事

飛兩君先つこんなものでいふたろふ見て呉を給ひと右の綱領を二人の鼻前に出さす暗ナール程君の筆の達者なるの感服々々併し僕の緒言の冒頭が氣を喰ひかい回顧をきい云々十四年までの文字は無要あらん來る明治二十三年を期し國會を開くの大詔の軍夫馬丁も口をすする所かれの其年月を書き記すと蛇足なるべし歟如何様暗雲君發言の通り冒頭の數文字ありて益なくかくて害なきよふなきと緒言の良否の別も吾党の主義も關することもなけきは文字上の修正いどふてもよいウ東京を始め諸縣改進黨の盟約を見るも大概内治の改良を謀り國權の擴充を期すとのあるよふあり且つ僕か去年出京の折り或る先生を訪ふて英國の改進黨と保守党の區別を聞きしに改進黨と專

ら内治の改良を謀り保守党と之を反して内治の整頓を願みす國權の擴充を期すものなりと云いれしや實も然ることあらん暗雲國權を擴充すると騒いよ所か内治整頓せざるに到底國權の振張の期すべからざる事となれば盟約の第三の内治を改良して國權の振張を謀る事と修正したるものなれ飛僕と起草者だから自分の文章を替めて維持しよふと云ふ淺問敷了簡でいふやうに兩君の修正説は餘り感服せざるなり殊も冒頭の數文字の如きは心を苦しめ慮を焦し起草せし積なり之を添刪せらるるとと一体全体分らぬ話と云ふべし又盟約第三の如きも國權の振張をきい内治の整頓せしこといふまでもなく内治の整頓すれば國權が擴充するの自然の道理よして恰も地球の循環して晝

夜をなし陰陽相待く萬物生植するり如き理屈なれり内治の改良を前とするも國權の擴充を後にするも亦之れに反するも其結果同一なるべし今兩君の説を衣服と喩んか仕立屋と頼んで拵る衣物を袖口の明き方の意にあらぬかいと加褻か氣と喰ひぬとか云ふて所々を直し遂に娘兒か初つ縫のよふと下さらぬ衣服となすと一般ならんや兩君幸に熟考せられよ敢起草者の僕の内治を改良と云云の説に反し改進保守の別を晝夜と喩へ手前味噌の鹽からき馳走を出だし雄辯を揮て吾々を瞞着せんとせしか誤説の大要は恰も東京日々新聞記者り在普國伯林府の伊藤參議の法律の完備なるよりは官吏の親切心を要す云云の奇談を其紙上と掲載し横濱毎日記者と攻撃せらるる狼狽の餘り

率強附會の説を放ちて其穴を掩へんとせしが如く愈々出て々益々化けの皮を顯わせしと一般なり其辨の快なるの稱すべけれどとも其誤魔うし手段は甚だ感服仕らざるなり依て熟考の二字の起草者の膝下へ返却すべし暗數本も同意を表しけれり緒言の冒頭と盟約の第三は修正するよと々はなれり飛然らと直と綱領を印刷し附し出來上り次第僕近村を遊説すべし暗本日如何なる吉日か朝まだきより數本君う駕を枉けられ政党的談話中計らす飛揚君も出會せられ芽出度盟約まで確定したれば今より花開亭も於て親睦會を開き的を揚げて浩然の氣を養んと其言葉の了らざるも藝的とは恐入りたり御馳走あら何時でも辭退のしないよ飛僕等は粹の話は分らない的を揚ぐるなら

今夜の關係あき三毛八をど云ふ折柄時飛揚君の今夜の關係なき云云の語の味のありろふな妙言ぶねなど夢中にあり互いのろけ廻る折りしも三毛猫のギヤー々々々

地方新聞組織の穴探

都もひかも押なべて新聞の流行此處は輕野邊代藏と云へるものあり朝夕に解語の花に戯れ父母の嚴責を遭ひ家の勘當せられ落魄して友人の居候となり親戚の厄介となり或は近所の若後家より一目さつけて巾着金を絞り或は下婢の尻をついて化けの皮を顯し親戚よりは放逐せらる友人よの見放さる其地は居ることすらぬ場合となり明治の初年故郷の空を跡に見て都へ飛出し知己の方を尋ねて厄介とあり間もなく不仕態を働き出奔同様に逃げ出し

ろきより諸所方々を駈け廻はりしが是れと云ふ目的もなきを始めて眠る覺め故郷へ立ち戻り三百代言となり英佛喇叭の大法螺を吹き立て愚民を籠絡して多少の金を得たれの家屋敷を購ひ自稱法律博士とあり其鼻の高き馬山の天狗も三舎を避けしむるか如き大天狗となり明治十三年の頃の稍々他人の信用を得けりて縣下を遊説して多少の人数を聚め自ら其總代と稱し國會請願者となり太政官より元老院へ出頭して輿論の在る所民情の存する所を縷陳して國會開設の急務あるを論せしか容られず空しく故郷へ立ち歸り快々として其日を送くる折りしも同氣相求同病相憐むとやら或る日喰詰り書生の狩野發助と云へるもの訪ひ來り恭しく名刺を出し輕野邊へ面接し吾輩

明治初年より諸縣を漫遊し九州より中國より奥羽より到る處有志者を訪ひたれども皆な平凡の人物にして節を折りて先生視するものなり夙より先生の御高名承り居たれば是非一たび拜顔を得て高論を拜聽せんと思ひけむの御當地より罷越へ今日推參せし次第ありと述ぶると聖獅鼻をヒク々々動かし笑を含みながらそむいた々々よふころ御來臨下され辱き次第あり爾御當地の市街家屋の結構は宏壯美麗にして其繁華なるも亦殆ど東京より譲らぬよふ見受けませしか一体物産の道も開け人民も富裕と見へます爾當地の産物と生糸が第一を占め居るうら横濱との取引も頻煩なるものから隨て繁華となり小民に至るまで今日の生計も苦むものは稀のよふなり爾御當地の景況を観ると他縣より比

それは政治の思想を有するもの頗る多きよふなれども新聞は更なる開けぬりと存しまする先生一新聞を起されては如何ですか爾左むいと拙者も先年より其目論見なれども御承知の通り職業繁忙なまの未だ其運びに至らざり幸ひ今度足下も御漫遊御尽力とあらは一新聞を起すへきり爾吾輩の如きの素より文事なく到底筆を把りて文壇より登り輿論を喚起するまの覺束なければと先生より社主とあらはれ一社の事を監理せらるゝならむ及ひそから奔走致しませう爾然らば一株五圓となし一千名を募れむよりろくろ五圓あれば活版諸器械を買い立派に發刊出来ませう去りなうら一千名の株主を募集するの難きとありませう爾何に拙者か申込め一千名位の株主を募

るを朝飯前のみとなり良しや一千名も滞たさるるもせよ有志金を募るに五千や七千位の金を得るは容易きことです猶如何様先生より御申込みなら株主を募集するの容易なれども吾輩の如き一書生か募集する時の中々六ヶ敷事と存し御話し申さるるあり、豊株主を以て組織すること々定めさるる上の方法書を起草して印刷し附し募集に着手せされのちからいか新聞の何んぞ名けよふ、猶小新聞なら旭新聞との繪入毎日新聞とか種々の題號の附しよろもありますか大新聞さから地名を附し、何々新報とせよよろしあらん、豊日々の發兌なきと何々日報と題名を附すへきか、結搦々々、豊社名は何々日報社でよろふ、猶是を又さ賛成々々、豊猶君の是をさて諸縣御遊歴なれの各新聞社の内

幕も御承知だろふから創立の趣意書は願ひいものた、先生の起草されざれば不都合の事もあり人の信用も少きければ是非此計りの偏り願ひいもので、豊手を拍て下婢を呼ぶ下婢ハイと来る此時猶野のシロリと下婢の顔を見る、豊硯と巻紙を持って来い、婢畏まりましたと持ち来さるる、卷紙を手も持ち一字書して、筆尖を嘗め二字記して、筆尖を舐り暫時ありて何より譯の分らぬ事を書き認め得意然として猶野も示を猶野讀忽ち同意を表しければ、印印刷に附すること、いなれり、下婢を呼んで酒肴を命し酒宴を開き献酬梭の如く見る々々七八本も傾けし、二人とも泥論論となり其場も酔へ倒れ猶野も眼を覺せし、はとや點燈時に及ひられ、滑野は泥酔の輕野邊を揺起し

一禮を述べて立ち去れり四五日過ぎて狩野は再び輕野邊を訪ふ折りの既に方法書も出来上り居たれば狩野は其方法書を以て縣下を遊説することとなり各郡各村の有志者を訪ひ規則を懐中より取り出して新聞發行の趣意を述べ其効能を説き立つきども狩野を信せざるのみならず輕野邊を信用して加入する者少く二日間奔走して足は痛木の如くなれども募集は應せしもの之僅く四五名も過ぎず狩野も殆んど困却して一先づ立ち歸り輕野邊に面會して其由を語りけきの輕野邊は已れか信用なきことは柵の上け有志者の時勢も通せず進取の氣力なきを歎き狩野は盡力を謝せし上例の如く酒宴を開らさし相變らそ酌前して狩野は一泊し其翌日再び遊説も出てたれとも前日の如

く更も募集は應とるものなきものうら狩野の一策を運らし方法書よの斯く々々の明文あれとも創業の際株主たる者の一年の後と無代價にて新聞を送くると吹き込みの流石の有志者も狩野か一言も籠絡せられ續々加入するもの多く五日間も株主五百有余名を得たれば狩野は一時下宿に立ち歸り右の都合を輕野邊の許へ文通せしかと輕野邊は其手紙を見一見して御書面の趣き逐一承仕候所頗る好都合と奉察候貴兄の御盡力不淺奉鳴謝候御間暇はれは今宵は一杯献し度候間夕景より御來車奉待候と返事を認ため送くりしもの酒頓童子の稱ゆる狩野は其返事を見て舌をちりちり時刻を違へず輕野邊を訪ひ先刻は御返事と共禮を述べ了らざるに貴兄の御奔走感謝々々

餘程好都合です。猶已れか猶策を運くらし。權謀を以て株主を募集し、後年又至り紛紜の生せん事は、百も承知二百も合點なれば、其事は一言半句も口外せず。輕野邊の人望に依り加盟せしか如く、説き立つれの輕野邊の其甘言又乘せられ、歡喜の餘り、貴兄も旅宿又居らきての不經濟なるのみならず、御不自由勝ならん拙宅へ御移りきされと述ぶきは、猶「先生の御厚志今お始めぬことなから、感銘の至り、第厄介さま又ありませうと述ふる折りしも、下婢の酒肴を持ち來る輕、何よのなくも一杯と猶野に献す。猶、毎度御馳走様と受け、それより献しつ酬れつ飲み居りし夜も更けわたる十二時近くなりければ、二人とも例の如く泥酔して、前後も知らず、醉倒れ居るものから下婢が來り、其場を片付ける物音よ

輕野邊は眼を覺し、猶野さんの床をのべると云ひ、あゝ自分分の寢室又入る。猶、床をのべて猶野を揺起し、猶、眼を覺し、見れば、豫て想を掛けたる下婢なれば、かつな眼をなしすませんと云ひ、なる袖を引け、下婢も憎くあらぬ男とや思ひけん、なびかん風情なりし、か人目の關もあれ、顔赤め出て行きける猶野の跡、又て衣服を脱ぎ、陽を撫なから床に入る。閑話休題、新聞發行の事を聞き、傳を諸所より加入の申込をとりて、株主も六七百名の多きに登りければ、輕野邊と自ら出京して、活版諸器械を買入れ、主筆の記者をも雇ひ、共に歸縣して、間もかく新聞は發行せしか、一社の全權は輕野邊又歸し、編輯の權は猶野に左右せらるゝの姿、あれと東京より聘されたる記者は、大に失望し、空しく其日々を送くる

うち狛野の彼の下婢と何時しか怪な交情となり世間の評判次第々々高くなりければ社金を握りて何處ともなく逃げ失せさり左きの東京下りの記者の此時に乗して舊習を一洗し社面を一變し社運を既墜と挽回せんと輕野邊に迫りて改革説を主張すれども輕野邊は改革を斷行せられ已きの權を失んことを恐れ言を左右と托して容易と改革を行ふの氣色も見危されは記者一同の自然不平の餘り碌々勉強もなさゝるものから隨て記事も面白くなく記事面白からさきは賣高の日に減し狛野も籠絡せられて入社せし者は脱社を申込む者あり負債の日々も増えて維持の目的なく遂に瓦解となる是を地方合資の新聞社と雖ども其盛衰常なく興亡定りなき所以ならん乎

珍談雜煮餅畢

明治十六年四月廿二日出版御履

東京府下谷區仲御徒町一丁目
十三番地

平民

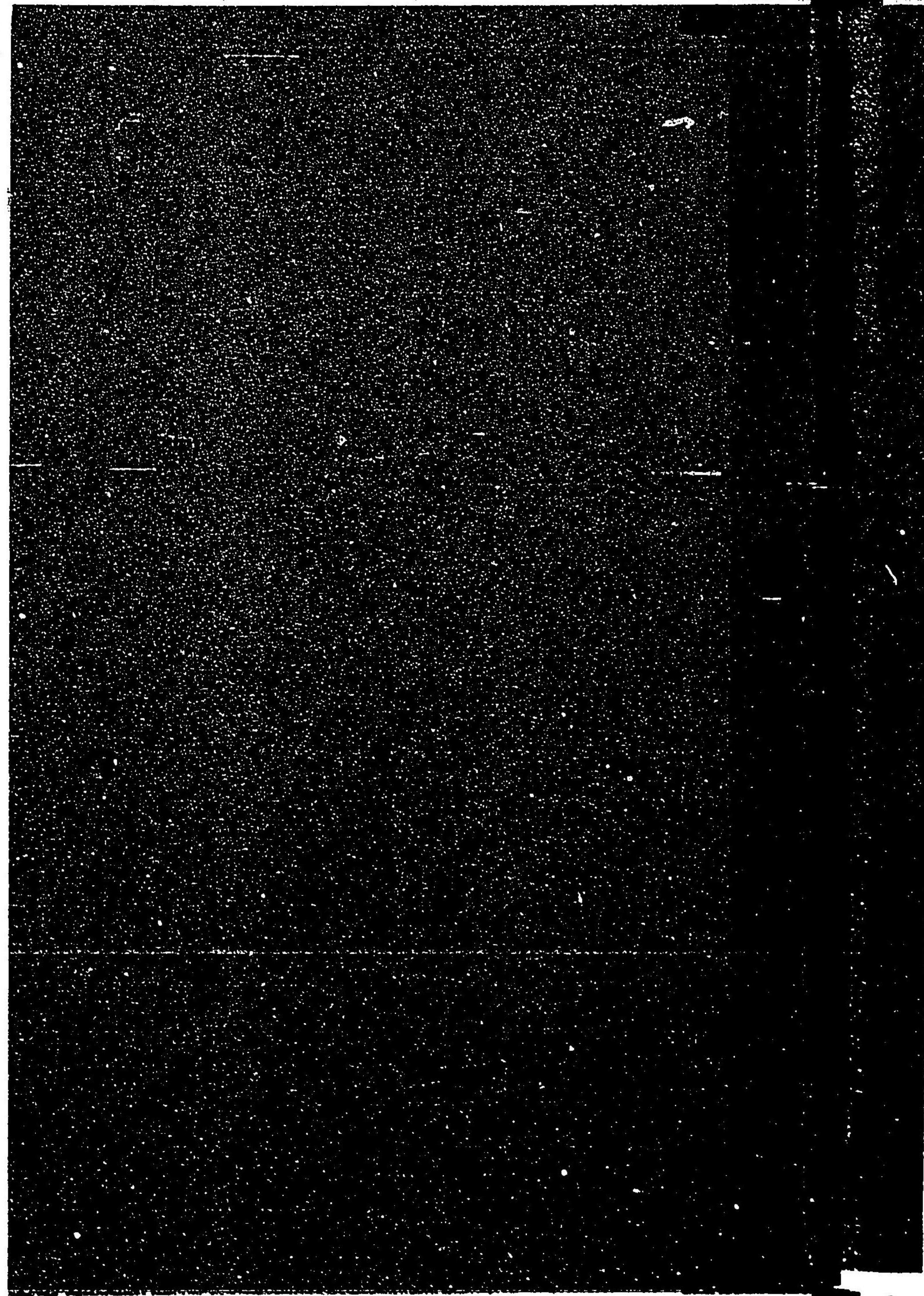
編輯人 高田實

同府芝烏森町一番地

平民

出版人 栗野忠雄

EX 658



0